人間研究　第54号　2018

成瀬仁蔵のアメリカ留学と『女子教育』の出版
― 日本女子大学校創設へ ―

片　桐　芳　雄*

Naruse Jinzo studying in the United States and publishing “Woman Education”:
To Found Japan Women’s University

Katagiri Yoshio

1．はじめに―アメリカにおける女子高等教育事情

成瀬仁蔵が留学した19世紀後半のアメリカは、大学の拡張期であるとともに女子高等教育の発展期でもあった。1861年にヴァッサー・カレッジが認可を得たのを皮切りに、のちにいわゆるセブン・シスターズと呼ばれる女子カレッジが続々と設立された。

これらの学校が、実際に学生を入学させて開校した年と、カレッジとしての認可を得た年との間には、ズレがある場合が少なくないが、それを認可取得順に、（認可年・開校年）で示すと次のようになる。

ヴァッサー（1861年・1865年）、ウェルズリー（1870年・1875年）、スミス（1871年・1875年）、ブリン・マー（1885年・1885年）、マウント・ホリヨーク（1888年・1837年）、バーナード（1889年・1889年）、ラドクリフ（1894年・1879年）。

ヴァッサー、ウェルズリー、スミスのように、認可取得後に開校した学校もあれば、マウント・ホリヨークやラドクリフのように、開校後かなりの年月を経てカレッジの認可を得た学校もある。

メリー・ライオンによって1837年に設立されたマウント・ホリヨークの場合は、女子セミナリーとしては最も早く開校したが、カレッジの認可を受けたのは1888年である。開校が早かったために、かえってカレッジの認可取得に必要な、施設や教育内容などの改革に時間がかかってしまったのであった[(1)]。

大学の共学化も同時に進行した。

1833年にオーバリン・カレッジが男女共学大学として設立され、その後、本格的な男女共学大学として1869年にボストン大学が設立された[(2)]。さらに1871年にマサチューセッツ工科大学、1872年にミシガン大学などのように、女子学生の入学を認める大学も現れた。

かくして、女子学生の数は、1870年の1万1千人から1900年の8万5千人へと8倍近く激増し、女子学生が全学生数に占める割合も、1870年の21.0%から1900年の36.8%へと拡大した[(3)]。

このような女子高等教育の拡大には、ボストン大学に学ぶ女子学生の育英団体として結成されたボストン大学女性教育協会（Boston University Woman’s Education Society）を母体に1877年に設立された「女性の大学教育を支援するマサチューセッツ協会」（Massachusetts Society for the University Education of Women, MSUEW）のような団体の活動も重要な役割を果たした[(4)]。当地の著名な女性活動家たちがこれに参加し、1870年代から80年代に大学教育を受けた「女性の大学卒第一世代」の人々も、多数これに加わった[(5)]。「家政学の母」と言われるエレン・リチャーズ（Ellen H. Swallow Richards, 1842-1911）やウェルズリー・カレッジの学長を務めたアリス・パーマー（Alice Freeman Palmer, 1855-1902）が、同協会主催の公開講座の講師となった。

しかし一方、女性の大学入学者の増大は、これへの批判も生んだ。例えば、エドワード・H・クラー

＊　日本女子大学名誉教授

クという医師が1873年に出版した『教育における性―少女たちへの公正な機会』（*Sex in Education: or, A Fair Chance for the Girls*）は、男性と女性はいかに生物学的・生理学的に異なるか、そして高等教育を受けることが女性の身体にいかに悪影響を与えるかを、事例を挙げて具体的に論じた[6]。

こうした主張には、多くの女性が反発し、事実、女性の大学入学者は、このような批判にもかかわらず、その後も増加を続けたが、同時に、世論の逆風は、女性たちに、真に女性にふさわしい大学教育とは何かを追究させる契機ともなった。

坂本辰朗が、アメリカ女性高等教育史の研究成果に基づいて述べるところによれば、共学大学として最初から設立されたオーバリン・カレッジの場合、共学制の採用は、学生確保が主たる目的で、教育実態においては、男女平等の教育が目指されたわけではなかった[7]。ヴァッサー・カレッジ以後の女性カレッジで行われたリベラル・アーツ教育についても、これが、女性にとってどのような意味で役立つのか、が問われることとなった[8]。

「女性の大学卒第一世代」の人々は、自らの大学体験をふまえて、女性の身体への配慮や健康教育の必要性を主張するとともに、女性にふさわしい大学教育の内容とは何かを追究し始めた。

成瀬仁蔵が留学したアメリカは、女子高等教育の拡大期であるとともに、その質が問われる時代となっていたのである。

２．成瀬仁蔵と「女性の領域」

別稿でも述べたように[9]、1891年１月アンドーヴァー神学校に留学した成瀬は、社会的実践の重要性を説く神学者タッカー教授の下で、「神学上の問題」に取り組むとともに、帰国後の女子大学設立を胸に、「女子教育の方針」についても考察を開始した。

成瀬の心を捉えたのは、当時のアメリカで議論になっているWoman's sphere（成瀬の言葉では「婦人の範囲」、今日の日本におけるアメリカ女性史研究では「女性の領域」）という概念だった。

「女性の領域」の中心は「共和国」を支える家庭である。女子教育は、その課題を担うことのできる女性を育てるためにこそ必要である。女子教育は、家庭にとどまらず、より広く、「共和国」を支える女性にふさわしい仕事、慈善事業や社会事業、さらには初等学校教員や看護師等の職業資質の養成へとその範囲を広げていった。

成瀬は、留学直後から作成し始めた「女子教育之方針」と題するノート[10]で、「婦人の範（「囲」欠か・片桐）ハ家ナリ。」と記した。そしてさらに「全界ニ尽シ得ルモノ。著書。手術[11]。教授。慈善業。演説。幼稚園。交際して人ヲ導クコト。医者。」と記した[12]。ここには、当時のアメリカにおける「女性の領域」拡大の認識が反映している。

他方、同年４月６日、成瀬はこの問題でタッカー教授と議論した。成瀬のノートによればタッカーは、「女性の領域」について、第１に「ホームヲ作ル事」、第２に「社会ノ中心トナル」、第３に「教育、伝道等、社会の為」、第４に「エコノミクス、職業等」、第５に「学術」、第６に「政事」と述べた[13]。タッカーの示す「女性の領域」は、まことに広いものであった。

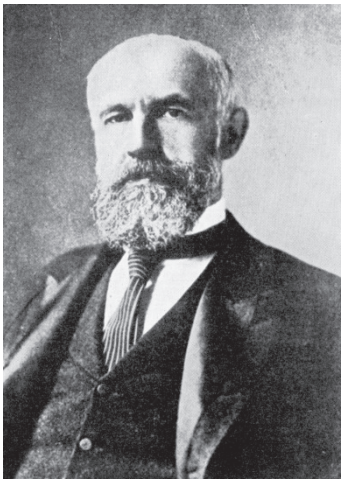
このように「女性の領域」を拡大すれば、いったいそれは、「男性の領域」とどのように異なるのか。

この１週間後、ウェルズリー・カレッジを訪問し滞在した成瀬は、女性ばかりのウェルズリーの教授たちに、この問題を持ち出した。彼女らの「輿論」は、「女子職務の範囲（ウーメンス スピヤー）、は男子の範囲と異なる処なきとの説」（ルビ・原文）であった[14]。

成瀬は、彼女らの見解に同意できなかったが、留学生活を続けるなかで、「女性の領域」は、じつは男性が勝手に決めているものなのではないか、家事や育児など、家庭内の、女性固有の仕事と思われているものも、家庭外の、教育機関や専門職業者に委ねることができるのではないか、そうだとすると、そもそも、男性と女性の違いとはいったいどこにあるのか、考えるようになった[15]。

このような「女性の領域」問題を考えながら、成瀬は、1892年６月28日、アンドーヴァー神学校を離れ、ニュー・イングランドの町々を旅して、９月12日に、次なる留学先、ウースターにあるクラーク大学に到着した。

クラーク大学は、アメリカ心理学の父、とも言われるスタンレー・ホール（Granville Stanley Hall, 1844-1924）が学長を務める大学であった[16]。ホールは、児童心理学と共に青年心理学の開拓者であ



スタンレー・ホール
（古川忠次郎著『ホール』（牧書店、1957年）所載）

り、女子教育にも深い関心を持っていた。

ホールの主著の一つは1904年に刊行された *Adolescence : its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion and education*（「青年期―その心理学と、生理学・人類学・社会学・性・犯罪・宗教及び教育との関係―」）全2巻である[17]。この書は、青年期の問題を、きわめて包括的に扱っており第17章は「青年期の女子とその教育」であった。もとよりこの書の刊行は成瀬の帰国後のことではあるが、成瀬が最も知りたいテーマをホールは研究していたのであった。

ダーウィンの進化論の影響を強く受けたホールは、関連する分野の先行研究を渉猟し、男性と女性の身体的精神的差異を強調した。「自然が定めるところによれば、文明が進めば進むほど、男女両性は、接近するよりも差異化するであろう[18]」。

さらにホールは、女性にとって、母性こそ、最も基本的なものだとして、「女性の身体と精神は、母であることのために作られている。それなくしては、彼女は、決して真の安息を得ることはできない[19]」とも述べた。

ホールの心理学は、男女それぞれに、それにふさわしい「領域」があることを説くものであり、「女性の領域」論を学問的に根拠づけるものであった。

ホールは、次のようにも言う。

「今日の学校教育が果たすべきことは、男子はヨリ男性的に、女子はヨリ女性的に育てることであって、男女の違いを消滅することではない。我々は、性的な差異という原則を尊重すべきであり、母性は、父性とはまったく異なるものだ、ということを忘れるべきではない。[20]」

ホールは、身体的・心理的な男女両性の違いを強調した。この知見は、女子大学創設を目指す成瀬にも、少なからぬ影響を与えた[21]。

『成瀬先生傳』によれば、クラーク大学で成瀬に会ったホールは、次のように述べたという。

「君が専攻した社会学は新しい学科であつて、まだ十分に研究されてゐない。従つて開拓すべき分野は広大である。殊に女子教育といふ部門に至つては、之を一個の専門として研究した学者はまだ聞いたことがない。君は幸ひに此の二つの新しい研究に着手したのであるから、論文を書いて発表してはどうか。[22]」

要するにホールは、成瀬がタッカーから学んだ「社会学」は、重要だが学問として未熟であると見ていたのであろう。それに比べれば心理学は、生物学や生理学の知見を基礎とした「科学的」なものである[23]。

成瀬は、クラーク大学での研究生活のかたわら、各地の女子大学を訪問するなどして、帰国後の大学創設に向けた具体的調査に取りかかった。残りの留学予定期間が1年間に迫ってきて、成瀬の準備にも拍車が掛かった。そしてその成果は、1896年出版の『女子教育』に凝縮された。

3.『女子教育』の出版―教示を受けた人々(1)

成瀬は、『女子教育』冒頭の「例言」に、「殊に左の諸氏は、余が在米中女子教育に係る研究及び観察に関し、重要なる幇助を与へられたるをもて、茲にその芳名を掲げて謝意を表す」として、次の人々の名前を挙げた[24]（肩書・人名は原文のまま。但しカッコ内は片桐）。

ダートマス大学総理ウヰリヤム、タッカー博士（William Jewett Tucker、1839-1926）

ボストン府牧師エチ、エチ、レヴツト氏（Horace Hall Leavitt, 1846-1920）

ブルークリン市牧師ドレマス、スカツダー氏（Doremus Scudder、1858-1942）

ウエレスレー女子大学前総理フリーマン、パーマー夫人（Alice Freeman Palmer、1855-1902）
マウントホーリクヨーク女子大学総理ミード夫人（Elizabeth Storrs Mead, 1832-1917）
スミス女子大学総理シーリー博士（Laurenus Clark Seelye, 1837-1924）
ヴアーサ女子大学総理テーラ博士（James Monroe Taylor, 1848-1916）
ブリンモーア女子大学総理ロード博士（James Evans Rhoads, 1828-1895）
クラーク大学院総理スタンレー、ホール博士（Granville Stanley Hall, 1844-1924）
ウースター洲立師範学校長ラセル氏（E. Harlow Russell）
ハーヴアード大学心理学教授ゼームス博士（William James, 1842-1910）
同体育部長医学博士サーゼント氏（Dudley Allen Sargent, 1849-1924）
スプリング、フキールト体操学校教頭医学士ギユリキ氏（Luther Halsey Gulick, 1865-1918）

このうち上３人は、成瀬研究では、すでにおなじみの人物である。タッカーは、成瀬がアンドーヴァー神学校時代に師事した教授であり、公私ともに世話になった[25]。レヴィットやスカッダーとは留学前から親しく、成瀬の留学そのものを親身にサポートした人々だった。アンドーヴァーのレヴィット家には留学早々から同居させてもらい、スカッダーとは新潟時代に共に苦労した仲だった。

さて、ウェルズリー・カレッジ前学長のアリス・パーマーは、別稿でも述べたように、タッカー夫人が、妻であることと社会的活動とを両立させている人物として例示した女性であり、既述の MSUEW のメンバーとしても活躍した。

アリス・パーマー
（杉本勝次訳『人及教育家としてのパーマー夫人の生涯』（岩波書店、1922 年）所載）

彼女は男女共学大学になったミシガン大学を卒業後、当時数少ない大卒女性として、1879 年、請われてウェルズリー・カレッジの史学担当教授に迎えられた。さらに 81 年、26 歳で学長代理に指名され、翌年第２代学長に就任した。

彼女は、形式主義を憎み、教科書を嫌って、実験法や自発的研究を推進した、今は亡き創立者・デュラントの意を発展させて、大学教育にふさわしい「ウェルズリー・タイプ」を確立した。同時に、高等教育は女性の健康を害するとの非難に抗して、後述のサージェント方式を導入して体育を奨励し、各学生に少なくとも１日１時間の戸外活動を求めるなどした[26]。

1892 年 11 月 28 日、成瀬はウースター州立師範

ウエルズリー・カレッジの体育館授業
（Jean Glasscok ed., *Wellesley College, 1875-1975: A Century of Women*, Wellesley College, 1975. p.160）

学校校長のラッセルの紹介状を持って[27]、ハーヴァード大学のあるケンブリッジにアリス・パーマー夫妻を訪ねた。彼女は、87年にハーヴァード大学哲学教授のジョージ・パーマー（George Herbert Palmer, 1842-1933）と結婚してウェルズリー・カレッジの学長を退職し、ケンブリッジに住んでいたのだった。

「多くの質問をして、大いに得るところがあった」と成瀬は日記に記した[28]。そしてさらに、この面談で印象に残ったことを8点、箇条書きした。

①パーマー夫人はとてもフレンドリーで、女子教育問題について、とても熱心に語った。

②非常にきびきびしした態度で、話もとても分かりやすかった。彼女は、私の名前をすぐ覚えた。

③先に外出する夫を見送るときの態度など、とても女性らしかった。

④彼女は喜んで私を援助すると言い、紹介状が必要ならいつでも手紙を寄越すようにと言った。

⑤彼女は、家事は女性の仕事だと言った（She said the house keeping is the profession of wife.）。

⑥女子高等教育には三つのタイプがある（と言った）。

⑦できるだけ多くの女性機関を訪ねるようにとアドバイスした。

⑧アメリカで最も優れた教育者は、ハーヴァード大学学長エリオット、ミシガン大学学長エンジェル、スタンレー・ホールらである（と語った）。

上記のエリオット（Charles William Eliot, 1834-1926）は、惜しまれつつウェルズリー・カレッジ学長を辞して結婚したアリス・パーマーについて、「彼女は、男性にとっても女性にとっても、愛と家庭生活が、その中心をなす至高のものであることを、自らの例で証明した[29]」と語ったという。

事実、夫ジョージ・パーマーは、それまでほとんど家事を経験したことがなかった妻アリスについて、彼女は「ほとんど最初から、家事に、優れた主婦ぶりを発揮し」、「どうすれば家事のやり方に、もっと知性を導入することができるか、常に研究しつづけた」と、回想記に記した[30]。これは、「家事は女性の仕事だと言った」という、上記の成瀬の記録⑤とも符合する。

このようにアリス・パーマーは、いわば「女性の領域」を堅持する人であった。共学大学を卒業してウェルズリー・カレッジの学長となった彼女は、女性が大学に進学すれば、それだけで女性が自立できる、とは考えなかった。女性が自立するためには、その具体的な力になる大学教育が必要だ。

そう考える大卒女性は少なくなかった。1882年1月、彼女らは女性大学卒業生協会（Association of Collegiate Alumnae, ACA）を設立した[31]。その中心にアリス・パーマーがおり、エレン・リチャーズやマリアン・タルボット（Marion Talbot, 1858-1948）がいた。

彼女らにとって、「女性の領域」の中心の、家庭における家事の合理化と質の向上（家庭の科学化）が重大な関心事であった。「家政学の母」と言われる、マサチューセッツ工科大学（MIT）卒業の自然科学者エレン・リチャーズが、生涯を賭してその課題に取り組み、アリス・パーマーはこれを支援した。1890年、ウェルズリー・カレッジに家庭科学（Domestic Science）の講座が新設され、その担当者としてマリアン・タルボットが採用された。

しかし、既述のように、成瀬がウェルズリー・カレッジを訪問した時、「女性の領域」を認めなかった教授たちは、このような措置に批判的だった。家庭科学講座は、タルボットが新設のシカゴ大学に採用されるとともに廃止された[32]。

アリス・パーマーは、成瀬との面談で、最も優れた教育者の一人としてスタンレー・ホールの名を挙げていた。彼女は家庭を拠点に「女性の領域」を拡大することこそ、女性の地位向上と自立につながると考えたのであろう。

4.『女子教育』の出版―教示を受けた人々(2)

マウント・ホリヨーク・カレッジ学長のエリザベス・ミードは、ジョン・デューイの盟友ジョージ・H・ミードの母親である。彼女は1890年から1900年までマウント・ホリヨーク・カレッジの学長として、1888年にカレッジ認可を受けた同校が、名実ともにそれにふさわしい大学になるために尽力した。

マウント・ホリヨーク女子セミナリーは、梅花女学校のモデルともなった学校であり、成瀬にとっては、かねてから親しみのある学校であった。彼は、1893年3月24日、マウント・ホリヨーク・カレッ

ジを訪ね、学生と教員たちを前に講演した。「私の話は、称賛を受けた」と成瀬は日記に記した[33]。時期的に言うと、この時ミードはすでに学長を退任していたが、この機会に彼女との面談が行われたのかもしれない。

スミス・カレッジ学長のロレナス・シーリーに会ったのは、成瀬がマウント・ホリヨークを訪ねた日の前日3月23日であった[34]。ロレナス・シーリーは1875年にスミス・カレッジの初代学長となり、1910年まで、35年間の長きにわたり学長を務めたのだった。

じつは成瀬はその少し前3月5日に、スミス・カレッジを訪ね、約700人の学生と教員を前に「日本におけるキリスト教の将来」について講演している。日記によれば「興味を持って聴いてくれた」[35]。この時、学長ロレナス・シーリーに会ったかどうかは不明だが、この2日後の3月7日に、成瀬はアマースト大学を訪ね、新島襄や内村鑑三が師事したジュリアス・シーリー前学長と会った。彼は、ロレナス・シーリーの兄である。成瀬が3月23日にロレナス・シーリーに招待されたのは、このような縁も役立ったであったろう[36]。

マウント・ホリヨーク・カレッジ学長のミードやスミス・カレッジ学長のロレナス・シーリーとどのような議論をし、どのような教示を受けたかは分からない。しかし両校での講演などを通した交流は、得るところが多かったであろう。

なお『女子教育』には、スミス・カレッジに関する記述が多い。ここには、タッカーの妻シャーロットの協力もあったであろう。

ヴァッサー・カレッジのテーラーやブリン・マー・カレッジのロードとの交流については、成瀬の記録からは、明らかではない。テーラーは第4代学長として30年近くその任にあり、ロードは、初代の学長として女子大学創設の苦労を味わった。その経験から成瀬は学ぶところが多かったのではないか。またヴァッサー・カレッジは、岩倉使節団に随行して留学した山川（大山）捨松が学び、卒業した大学であり、ブリン・マー・カレッジは津田梅子が2度目の留学をしたときに入学した大学である[37]。成瀬は、これらのことを知って両大学を訪ねたかもしれない。もとより、これらの大学もセブン・シスターズに属する。

ウースター州立師範学校校長のラッセルは、ことのほか成瀬に親切であった。成瀬は、1892年10月10日の日記に次のように書いている。

「彼はとてもフレンドリーな男だ。彼に会ったとき、寄宿舎について質問すると、多忙であるにもかかわらず、私をその場所まで連れて行ってくれた。

私は何の紹介もなしに行ったのだが、彼は私を、まるで古くからの友人であるかのように、完全に信頼してくれた。彼は私に、彼の学校を研究するあらゆる機会を提供してくれた。彼の人格を知れば、彼の教育についての能力が優れていることが、直ちに、明らかだった。[38]」

成瀬によれば、ウースター州立師範学校の生徒はほとんど女性であった[39]。この学校では自発的な活動が奨励され、そのような教育が実践されていた[40]。1874年の創立以来、1909年まで、ずっと校長を務めたラッセルは、児童研究運動の提案者でもあった[41]。成瀬はここでも多くのことを学んだであろう。

おまけにこの学校は、教育学者の篠田利英が、2年間留学して卒業した学校でもあった。既述のようにアリス・パーマーへの紹介状を書くなど、ラッセル校長が成瀬に親切だったのは、このような縁があったためだったかもしれない。ちなみに篠田は、帰国後、女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）教授になり、さらに日本女子大学校で、1901年の創立時から1915年まで教育学を教えた[42]。

ウースター州立師範学校第1回卒業生
（https://www.pinterest.jp/ilovewormtown/worcester-colleges-worcestercolleges/（2017.10.6 閲覧）による）

心理学者のウイリアム・ジェイムズとの面談については、成瀬の記録によっては、明らかではない。ハーヴァード大学のあるケンブリッジには、アリス・パーマーとの面談の時に訪れているし、また「日記」によれば[43]、1893年3月17日から4月6日までケンブリッジに滞在したので、その機会に会ったかもしれないが詳細は不明である。なお学監の麻生正蔵は、1905年から翌年1月までハーヴァード大学に滞在したとき、ジェイムズと親しく交流したと述べている[44]。これは、成瀬の交流を引き継ぐものであったかもしれないが、そのことについて麻生は全く触れていない。いずれにせよ成瀬が、宗教観や「主行主義」に関して、ジェイムズの著書『宗教的経験の諸相』や『プラグマティズム』から多くを学んだことは明らかである[45]。

ハーヴァード大学体育部長のサージェントについてもジェイムズ同様、具体的な面談の記録はないが、アメリカ体育史上に名を遺す重要人物である。彼は女子体育にも熱心で、ウェルズリー・カレッジのスポーツコーチにもなった[46]。学長だったアリス・パーマーが、サージェント方式を導入したことは、前述の通りである[47]。

最後に名前の出てくるルーサー・ギューリックとの出会いは奇縁であった。

そもそもギューリック家は、アメリカン・ボードの宣教師として日本との関係がきわめて深い。とりわけ叔父のオラメル・ギューリックは、北日本ミッションの宣教師として新潟に派遣され、澤山保羅とも親交が深かったから、当然、成瀬もよく知る仲だったはずである[48]。

成瀬は、このような関係を知ったうえでルーサー・ギューリックを訪ねたのか、あるいは逆に、会ってみたら偶然の関係の深さに驚いたのかは分からない。しかし、ルーサー・ギューリックの兄シドニー・ギューリックとは、のちに帰一協会の活動で、いわば同志として協力し合ったのであった[49]。

ルーサー・ギューリック
（Springfield College Digital Collections による）

成瀬は1892年12月26日にスプリング・フィールドを訪ねた。ここには、1885年に創設されたキリスト教労働者学校を前身とするYMCA国際訓練学校（International YMCA Training School）があった。ルーサー・ギューリックは、これに体育学校を併設しその責任者となっていた。彼の名前を歴史にとどめるのは、バスケットボールの考案者としてである。冬季に屋内でできる競技として、若い教員のネイスミス（James Naismith）と協力してバスケットボールを考案したのであった。

成瀬が訪ねたのはちょうどその1年後で、ギューリックは、新たに考案したバスケットボールの普及に力を入れていた時であったから、これについて成瀬に熱く語ったことであろう。成瀬は帰国後、さっそく梅花女学校にこれを取り入れたのだった。ギューリックはサージェントの教え子でもあった[50]。

成瀬の日記によれば、成瀬は、この年の年末年始をスプリング・フィールドで迎えた。校長だったリード（David Allen Reed）も、この遠来の客を、とても親切にもてなしてくれた[51]。

以上、『女子教育』に謝辞のある人物と成瀬との関わりについて、判明する限りの事実を述べてきたが、もう一人、留学中に面談して、その後の成瀬の活動に重要な役割を果たした人物を紹介しておきたい。前述の、ハーヴァード大学学長チャールズ・W・エリオットである。

成瀬のエリオットとの面談記録は、さきのアリス・パーマーと同じ1892年11月28日付の日記に出てくるので、その前後に面談したのであろう。成瀬は、次のように記録している[52]。

①フレンドリー。
②寄付金を集めるときの秘訣（secret）は、信頼、正直、永久使用権（permanent use）。
③学生管理の秘訣は、自己統制（selfcontrol）。
④学部管理の秘訣は、公正（fair）、公明（just）、公平（impartial）。

エリオットは、1869年から1909年まで40年間もハーヴァード大学学長を務めた人物であった。彼はまさに、大学運営の「秘密」を、成瀬に語ったの

日本女子大学校を訪問したエリオット一行と隣に立つ成瀬仁蔵
（『家庭週報』第192号1912年7月12日）

である[53]。

後年、1912年に来日したエリオットは6月29日に飛鳥山の渋沢栄一邸での昼食会に出席し、発会直後の帰一協会について成瀬や姉崎正治や浮田和民らと語り合い、7月5日には日本女子大学校を訪れ講演をした[54]。同年8月、エリオットの帰国を追いかけるように渡米した成瀬は、ボストンのエリオット邸を訪ね、帰一協会説明の英語原稿を「一々訂正してテニヲハまでも直して」もらったのであった[55]。さらに1917年から日本女子大学校で実施した科目自由選択制の採用は、エリオットのハーヴァード改革に学んだものであった[56]。

5.『女子教育』の内容（1）—女子教育の方針

成瀬は『女子教育』の第1章「女子教育の方針」で、「欧化主義」「国粋主義」の両者を批判した上で、女子教育の方針を確定するには、必ずや考究すべき要件があるとして、次の2点を挙げた。

「（第一）心身上より女子の天性及び能力を研究し、以て女子の働き得べき一般の範囲を定め、（第二）国情上及び時勢上より考察し、以て女子の働き得べき一般の範囲に変更を加へ、将来の日本女子の、当に働くべき範囲を定めざるべからず。[57]」

「女子の働き得べき一般の範囲」とは、言うまでもなくWoman's sphere「女性の領域」のことである。成瀬は、「心身上」と「国情上」「時勢上」の両面から、この範囲を定める必要があると言う。いわば、前者は、ホールの心理学的知見よって、後者は、タッカーの社会学的知見によって、学び取った観点であった。アメリカ留学で学んだホールとタッカーの知見を総合して、成瀬の留学研究報告書というべき『女子教育』は、書かれたのであった。

成瀬は「男女能力相違説」を検討して、男女の「身体上多少の異同」があり、また「精神上にも、亦多少の差異」あること、そうであれば男女の領域にも「若干の差異ある」ことを認める。しかしそれは絶対的なものではない。したがって「畢竟女子の範囲を区画制限して眼前直に家政上に実用を奏するが如き、極めて浅薄なる、極めて手近き、実利教育に限るが如くに見做す」のは誤りである、と論ずる。そして次のように述べる。

「勿論男女の職務に、直接間接、若しくは軽重の区別を附すべき点は、往々之れありと雖も、必ずしも男女両性の範囲に就き、互に孤立せる別世界の如くに、判然区画すべき者に非らず。」（以上の引用は7-11：36-38）

結局成瀬は、ホールの知見を取り入れつつ、これをタッカーの社会学的知見によって相対化した、と言うべきであろう。ここに成瀬の、「婦人として」よりも「人として」を上位に置く女子教育観が成立するのである。

すなわち成瀬は女子教育の方針として、まず第1に「重きを普通教育に置くべし」を挙げる。「女性の領域」が絶対的なものでないとすれば、教育もまた、「女性の領域」に直接役に立つ実利教育ではなく、何よりも人格形成のための一般教育（general education）が重視されねばならない[58]。これは成瀬が、以下のような、女性が現実に置かれる状況を考慮したためでもあった。

「女子の主要なる天職は賢母良妻たるにありとするも、その一生は必ずしも妻母たるの境遇のみに止らず。又た娘嬢たるの境遇あり、寡婦たるの境遇あり、個人として働くべきの境遇あり、国民として行ふべきの境遇あり。実に然り、女子も亦人なり」（13-14：38-39）

もとより、この引用にもあるように、成瀬にとって女性の主要なる天職は、「賢母良妻」となることである。

かくして成瀬は女子教育の方針の第2に「女子の

天職を尽すに足るの資格を養はしむべし」を挙げる。そして次のように述べた。

「著者は彼の女子の範囲を余りに狭隘に制限し、又は女子の範囲は、全然男子のと区別すべき孤立世界の如くに見做すの誤謬たるを知る。されども、心身の構造及び社会の組織上よりして、賢母良妻たるは、女子の天職の主要なるものなりと信ず。故に人となるの教育と共に女子たらしむるの教育を授くるの必要を認むるものなり。」(14-15：39)

「女子の天職中、最も重要なるは、母として子女を教育するの天職なり」(17：40) と、ここでは成瀬は、ホールに倣って母としての女性の役割を重視した。それ故に、「妻たり主婦たるの女子の職務を完ふせんには、家政学を研究し家政に必要なる知識と経験とを積まざるべからず。」(22：43) と家政学[59]の重要性を述べた。

成瀬が最後の第3に挙げた女子教育の方針は、「国民たる義務を完うするの資格を養ふべし」であった。これは女性にも「社会の一員」「国家の臣民」(25：44) としての自覚を求めるものであって、それは同時に、「女性の領域」を家庭に限定することを、「殊更に女子教育の範囲を狭隘にするが如きは亦誤謬の甚しきもの」(26：45) と批判することでもあった。

以上の三つの方針をもとに成瀬は、この章を以下の文章で締めくくった。

「之を要するに、今後日本の女子高等教育の方針は、(第一) 女子を人として教育する事、(第二) 女子を婦人として教育する事、(第三) 女子を国民として教育すること是れなり。」(29：46)

これは、日本女子大学の教育方針として、現在に継承されている。

6.『女子教育』の内容（2）―知育の重視

成瀬は以下、第2章知育、第3章徳育、第4章体育、第5章実業教育の順で論述を進めた。

知育・徳育・体育と並べるのは、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer、1820-1903) の影響だとしても[60]、第2章の冒頭に「高等女子教育の主要なる部分は知育にして、其の知育の主眼は知力即ち思考力を発達せしむるに在り。」(31：47) と述べているのは注目される。これは第1章で述べた「普通教育」の重視と連動しているからである。成瀬は言う。

「而して、思考力は広く事物を考察するに適するを貴しとす。故に一般普通の知識を与えざる可からず。蓋し知識広濶ならざれば、考察の範囲も亦従て拡らざればなり。」(同上)

まず何よりも、知育によって、知識を豊かにし、知力即ち思考力を発達させ、「考察の範囲」を広げねばならない。知育の軽視、これが本邦教育上の「最大欠点」(同上) である。

かくして第2章知育は、分量的にも、他の章の約1.5倍の頁数が割かれるのである。

以下成瀬は、英米における女子高等教育の状況を、縷々述べる。当時欧米で盛んにおこなわれた男女の生物的差異の研究に触れ、男女の知力に優劣なしとの研究成果を紹介し、スミス・カレッジ等を自ら訪問して得た知見を披露した。そして「以上論述せし所より之を推せば、女子の脳力(ママ)は男子の脳力に劣るものにあらずして、高等知育にも能く耐ゆるものなりと云ふも、亦速断にあらざるべし」(44：62) と結論した。

そして成瀬は、「本邦の高等女子教育は国情、国勢に適応すべきもの」(71：69) と述べつつ、しかし「教育上の原理原則」は「人種的若くは国家的のものにあらずして、人類的若くは世界的のもの」(72-73：69) と主張した。この観点から成瀬は、日本の女子教育が卑近な「実利主義」(83：74) に偏していることを難じ、「知育に重きを置く」(75：70) ことの必要を力説したのであった。

さらに成瀬は具体的な「普通教育」の方法、すなわち「読書作文」や「数学理科」や「外国語」の教授法について、具体的に詳しく論じた。

このように知育による思考力の発達を重視する成瀬が、第3章で、徳育の方法として、「注入的、束縛的、器械的、消極的、の教育方法」を排し、「開発的、自動的、自然的、積極的、の教育方法」(139：101) すなわち「開発的徳育法」(144：103) を提唱したのは、蓋し当然というべきであろう。

道徳は、徳目を注入することによって得られるものではない。「実に論語読みの論語知らずなり」(150：106)。「聖賢の書を読むも、実践躬行の労を取らざる者」には道徳は身につかない。知育によっ

て獲得された思考力によって考察の範囲を広げ、それに基づく「実践」こそ道徳「教育上の最良の要素」（同上）である。

その上で成瀬は「宗教は人類間最大の感化力」であるので、「故に宗教教育は道徳と分離すべからざるのみならず実に欠くべからざるものなり」と述べた（156：109）。しかしながら学校は、特定の宗教を教えるべきではない。「学校に於ては唯凡ての人心に通有せる宗教心を開発するをもて目的とせざるべからず」「一定の宗教宗派を信ずることに至ては全然之を生徒各自の自由撰択に任すべき」だからである（157：109）。これは、伝道と教育を「混合」した宣教師派学校への批判であり、成瀬自身の、これとの決別の宣言であった。「凡ての人心に通有せる宗教心を開発する」宗教教育のあり方の追究は、成瀬の終生変らぬ課題となった。

第4章体育では次のように述べた。

「著者身幹短小、而して米国に遊ぶこと三星霜、（中略）於是乎或は彼土に在る間実地に観察せし所、或は学者に就て質せし所、或は読書に依て得たる所の材料を此処彼処より蒐集し来たり、（第一）に体育の歴史を略述し、（第二）に欧米各国現今体育法の著名なるものを記載し、（第三）に聊か著者の意見を加へ、以て憂国の情切実なる読者諸君の参考に供せんと欲す。」（186-187：122）

体育への関心が高いとは言えない当時の日本の状況を踏まえ、成瀬はアメリカ留学で得た知見を詳しく提示した。欧米におけるギリシャ以来の体育の歴史を紹介し、ドイツ、スエーデン、フランス、アメリカの体操法のそれぞれの特徴と長短について述べた。もとより成瀬の推奨するのは、自ら実見した「強力と敏活と優美とを兼備したる個人より成立せる国民を養成せんとする」（217：137）アメリカ式体操であった。

成瀬は、「米国女子大学の体育」という項を起こして、ウェルズリー等の体育の状況を述べ、当時成瀬が校長を務める梅花女学校で採用した「球籠（マリカゴ）遊戯」（232：144）につき、具体的に紹介した。言うまでもなくこれは、ルーサー・ギュリックに学んだものであり、その後長く、日本女子大学校の名物競技となった。

7.『女子教育』の内容（3）―未完の女子大学論

成瀬は、第2章知育の第2節「本邦の高等女子教育の方針」の中で、「吾人は重きを高等普通教育にをき、次に一種の女子大学様の専門学校を設立せんことを期す。」（80：73）と述べた。さらに第3節「本邦高等女子教育の程度」においては、高等普通教育を目的とする高等女学校の上に、「修業年限三ヶ年位の一種の大学を起し、最高の教育を受く可き資格ある女子の為めに専門の業を得るの便を開くの必要あるを信ずる者也」（114：89）と述べた。そして「先づ一の女子大学を関東に興し、漸次、関西に一校、九州に一校、都合三校の女子大学を興」（114-115：89）すべきと主張した。

すなわち成瀬は、大学を、高等普通教育の上に位置する「専門」の教育機関だと、考えていた。

そのうえで成瀬は「今試に其部門の大要を列挙すれば」と述べて、下記の専門を示した[61]。

○家政部：
世態学、家庭教育学、経済学、家庭衛生学、看病学、家庭美術、心理学、小児学、博物学、食品化学、生理学、衛生学、実習。

○教育部：
社会学、応用心理学、生理学、教育学、教育史、教育文学、教育制度、女子教育学、家庭教育、小児学、家政学、文学、実習。

○文学部：
邦文学、支那文学、英文学、歴史、哲学史、教育学、家政学、心理学、実地演習。

○音楽部：
音楽、楽器、音楽論、音楽史、和文学、英文学。

事宜に応じては、
○理化学部　○商業学部　○体操学部[62]
○美術学部
等を加ふるも亦可なるへし。（115-116：90）

しかし、上の四つの「部」と下の四つの「学部」の意味の違い、各部・各学部の目的や意義、あるいは相互の関係等についての言及はない。

他方、以上のように、知育に86頁、徳育に62頁、体育に60頁を当てて論じ来った成瀬は、最後の第5章の実業教育に9頁、付論の専門教育に7頁

を当てたに過ぎなかった。このような頁数の少なさは、これらの問題を十分に展開する用意がなかったことを窺わせる。

そもそもここに言う「実業教育」は、特定の産業や職業と結びついたvocational educationの意味ではなく、本文中で「手工教育」と言い換えているように、むしろmanual trainingの意味である。すなわち、のちの新教育運動において日本に紹介された労作教育や作業教育の考え方に近い。事実成瀬は、日本女子大学校において「実業的社会的教育」を実践するが[(63)]、これはジョン・デューイの『学校と社会』などに学んだものである。言い換えれば、その淵源がすでにここに示されている、とも言えるのである。

もっとも成瀬は、この章の最後に、「実業教育の必要なる所以として算入すべきもの尚ほ一あり」(245:151)として、実業教育が「自活の基礎」(同)となることを主張してはいる。そして第5章実業教育の付論である「専門教育」では次のように述べているのである。

「故に専門教育とは国民たる義務責任を尽さんが為めに、一業を撰んで一生の職となし、その職を完ふするに必要なる知識と技倆とを修養せしむるの謂ひなり。而して男子は勿論なりと雖も女子に於ても亦之を修むるの必要及び義務あり」(248：152)

それは、「(一)自治の為め」「(二)進歩の為め」「(三)社会の為め」「(四)老後の為め」に必要だと言うのであるが、その具体的な内容は明らかではない。

このように大学が行うべき専門教育を、付論としてしか述べ得なかったということは、第2章第3節で、部や学部の「大要」が羅列的に「列挙」されるにとどまったことと関係しているのではなかろうか。

『女子教育』は、女子高等教育の必要性を世に訴えたものとされるが、それは、あくまでも、高等教育の基礎としての一般教育(general education)を主に論じたものであった。家事に役立つ卑近な実用教育ではなく、人格形成に資する、知育を中心とした一般教育の意義こそ、まずは論じられねばならなかった。女子大学にふさわしい専門教育の内容は、今後の展開に委ねられたのである。

注

(1)この間の事情は坂本辰朗『アメリカ教育史の中の女性たち―ジェンダー、高等教育、フェミニズム』(東信堂、2002年)第3章「セミナリーからカレッジへ―マウント・ホリヨークにおける“改革”とそのパラドックス」に詳しい。ちなみにマウント・ホリヨークのカレッジ昇格を議論するために開かれたマサチューセッツ州会議の聴聞会で、その昇格への反対論を展開したのが、ウェルズリー・カレッジの学長を務めたアリス・パーマーと結婚したばかりの夫のジョージ・ハーバート・パーマー(ハーヴァード大学教授)であった。施設設備やカリキュラムの貧弱さがその理由とされたが、このような見解は、当時の、プライド高き大卒女性たちにも共通するものであった(同上、187-189頁)。なお、マウント・ホリヨーク・セミナリー設立の意義とその後の「危機」については、小檜山ルイ「19世紀女子高等教育における宗教と科学―マウントホリヨークの事例―」(『自然・人間・社会』(関東学院大学経済学部総合学術論叢)第20号1996年1月)に詳しい。また同「北米出自の女性宣教師による女子教育と「ホーム」の実現」(キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館、2016年)参照。

(2)ボストン大学設立の意義については、坂本辰朗『アメリカ大学史とジェンダー』(東信堂、2002年)第3章「ボストン大学における男女共学制と大学―教育におけるジェンダーの問題」に詳しい。

(3)同上109頁。

(4)同上67-68頁。

(5)同上70頁。

(6)同上111-125頁に本の内容とそれをめぐる論議が紹介されている。なおクラークについては成瀬仁蔵『女子教育』(青木嵩山堂、1896年)217頁にも言及があり(『成瀬仁蔵著作集』(以下『著作集』)第1巻(日本女子大学、1974年)137頁)、これについて馬場哲雄「成瀬仁蔵の「女子体育論」再考」(『日本女子大学紀要・人間社会学部』第22号、2011年)

が丁寧な検討をしている（7-8 頁）。

（7）前掲『アメリカ大学史とジェンダー』11-14 頁。なおジェーン・ローランド・マーティンは「今日では、この大学（オーバリン・カレッジ・片桐）を実質的には男女共学の大学ではなく、「男女別クラス編成の（coinstitutional）」大学と呼ぶ人もいる」と述べている（「男女共学の世界における男女別学校教育」（尾崎博美訳）生田久美子編『男女共学・別学を問いなおす―新しい議論のステージへ―』東洋館出版社、2011 年）。

（8）同上 214-216 頁。

（9）「成瀬仁蔵と「女性の領域（Woman's Sphere）」―アメリカ留学で学んだこと―」（『愛知教育大学研究報告』第 67 輯（教育科学編）2018 年 3 月刊行予定）

（10）「女子教育之方針」は、日本女子大学成瀬記念館から、2017 年度中に日本女子大学資料として公刊予定である。なお筆者が執筆した解説が『成瀬記念館』No.32（日本女子大学成瀬記念館、2017）に掲載されている。

（11）ここで言う「手術」とは、芸術などを含む「手仕事」を意味していると思われる。

（12）「女子教育之方針」31-32 頁。

（13）同上 51-52 頁。

（14）成瀬仁蔵「ウエルズレー女子大学観察略記（二）」（『女学雑誌』269 号、1891 年 6 月 13 日。『著作集』第 1 巻所収）。成瀬は、この観察記に「教員は教授（プロフェサー）十四名助教授（チーチャー）五十余名（悉く女子）」と記している（「同上（一）」（『女学雑誌』267 号、1891 年 5 月 30 日。『著作集』第 1 巻 222 頁））。なおウェルズリー・カレッジの創設者デュラント（Henry Fowle Durant、1822 - 1881）は、教員は女性によって構成すべき、と考えた。 したがって 1895 年時点でも、男性教員は、2 人の教授と 4 人の講師のみで、その後増加したとはいえ 1925 年時点でも全教員の 15％であった（Jean Glasscok ed., *Wellesley College, 1875-1975: A Century of Women*, Wellesley College, 1975. pp.87-92）。

（15）この点は、注 9 の別稿第 7 節で論じた。

（16）クラーク大学は 1887 年創立とされるが、開学したのは 1889 年 10 月で、スタンレー・ホールは初代学長になった。管見によれば、ホールについての、日本語による唯一の研究書に古川忠次郎『ホール』（牧書店、1957 年）がある。なおホール（岸本弘・岸本紀子訳）『子どもの心理と教育』（世界教育学選集第 45 巻、明治図書出版、1968 年）がある。

（17）日本語訳に中島力造、元良勇次郎ほか訳『青年期の研究』（同文館、1910 年）があるが、原書の一部が省略されており全訳ではない。

（18）G. Stanley Hall, *Adolescence : its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion and education*, Vol.2, New York: D. Appleton and Company, 1904, p.617. 訳書 658 頁（但し訳文変更、以下同様）。

（19）*Ibid*., p.610、訳書 653 頁。

（20）*Ibid*., p.617、訳書 659 頁。

（21）成瀬仁蔵の旧蔵書を保存する成瀬文庫収蔵のホールの原書、前掲 *Adolescence* 及び *Youth : its education, regimen, and hygiene*. New York: D. Appleton and Company, 1907 には下線を引くなどして読まれた痕跡が明瞭である。なお 1918 年に臨時教育会議に提出された『女子教育改善意見』には、前掲 *Adolescence* から 3 箇所引用されている。ちなみに *Youth : its education, regimen, and hygiene*. に和田琳熊訳『青年期の心理及教育』（警醒社、1914 年）がある。

（22）仁科節編『成瀬先生傳』（桜楓会出版部、1928 年）131 頁。

（23）他方、タッカーの妻のシャーロット・C・タッカー（Charlotte C. Tucker, 1858-1944）は 1892 年 10 月 4 日付で成瀬仁蔵宛てに送った書簡（成瀬記念館所蔵）で、「夫タッカーは、クラーク大学留学の利点（advantages）は必ずしも多くないのでその年度の後半はオーバリン大学に移った方が良いと言っている」と記している。ホールとは逆に、タッカーの方は、ホールの心理学に依拠する女子教育観を、必ずしも高く評価していなかったことを想像させる。

（24）『著作集』第 1 巻 31-32 頁。そしてさらに、次のように書き加えた。「本書に引用せる材料

は多く余が在米中研究観察せしものに係ると雖も、又余の研究観察に幇助を与へし諸氏より直接に授かりたるもの、若しくは書籍雑誌より引用抜摘せし所少からず」（同上、32頁）。

(25) 注23に紹介した書簡によれば、タッカーは、クラーク大学入学後の成瀬の研究生活について、成瀬自身からの相談を受けてのことと思われるが、経済状態をも含めて心配している。なおシャーロット・タッカーの1895年1月3日付成瀬宛書簡（成瀬記念館所蔵）は、成瀬が送ったちりめんの布に対する礼状であり、成瀬帰国後もなお、両者に親しい交流があったことを示している。なお、この手紙には、日清戦争などについてのタッカーの感想も、添え書きされている。

(26) アリス・パーマー没後、夫のジョージ・パーマーが執筆・出版した *The Life of Alice Freeman Palmer*. Boston: Houghton, Mifflin, 1908, pp.119-121, 130-131。なお本書の訳書に杉本勝次訳『人及教育家としてのパーマー夫人の生涯』（岩波書店、1922年）がある。ウェルズリーで行われた体育、とりわけ鍛錬中心の形式的な体操に対して、身体を通しての人間形成を目指した「新体育」の意義については、前掲馬場論文及び同「成瀬仁蔵とアメリカ留学中の女子高等教育における体育・スポーツ」（『日本女子大学紀要・人間社会学部』第15号、2014年）参照。

(27) ラッセルが書いた紹介状の写しが11月17日の成瀬の日記に記されている（「日記」『著作集』第1巻531-532頁）。

(28)「日記」『著作集』第1巻531頁。原文英語、日本語訳は拙訳。

(29) *The Life of Alice Freeman Palmer*. p.178. 訳書222頁（但し訳文変更、以下同様）。

(30) *Ibid*., p.224. 訳書278頁。

(31) 前掲『アメリカ大学史とジェンダー』229頁。

(32) 最初から男女共学大学として創設されたシカゴ大学は、入学する女子学生に対応するため女子学生部長（Dean of Women）を置き、アリス・パーマーの就任を要請した。しかし居住地のケンブリッジとシカゴは遠距離で、充分に職責を果たすことができないと考えたアリスは、自分の代わりにタルボットを推薦した。タルボットは、女子学生部長に就任するとともに公衆衛生学（Sanitary Science）の助教授となった。このポストは社会学部の中に置かれるが、これがのちのホーム・エコノミックス（家政学）成立の一つの重要な足掛かりとなった。なおこれらの事情は、前掲『アメリカ大学史とジェンダー』第4章に詳しい。一方、大森秀子「日米女子高等教育におけるリベラル・エデュケーション―その発祥と展開―」（茂牧人・西谷幸介編『21世紀の信と知のために―キリスト教大学の学問論―』新教出版社、2015年）は、小島容子「日・米女子大学教育の比較研究序説―わが国の女子高等教育の発達に及ぼした米国東部女子カレッジ教育の影響を中心として―」（日本女子大学社会福祉学科紀要『社会福祉』第24号1983年）をも参照して、ブリン・マーとウェルズリーとのカリキュラムを対比しつつ、タルボットを媒介とする後者とシカゴ大学の家政学との関係について論じている。なおタルボットは、のちに訪米した成瀬の帰一協会活動に対して賛同のコメントを寄せている（『帰一協会会報』第三、1913年12月）。またパルミエリは、ウェルズリーにおいて、女性向けのカリキュラムは表面的には置かれなかったが、インフォーマル・カリキュラムでは女性の著作を読ませるなど、女性中心カリキュラム（Women-Centered Curriculum）が目指された、と述べている（Patricia Ann Palmieri, *In Adamless Eden: The Community of Women Faculty at Wellesley*, 1995, Yale University Press. pp.178-180）。

(33)「日記」『著作集』第1巻528頁（原文英語）。

(34) 注23の1892年9月の書簡でシャーロット・タッカーは、成瀬をシーリー学長に紹介する、と記している。93年3月のスミス・カレッジ訪問は、その約半年後のことであるが、シャーロットの紹介も役立ったであろう。なお注9の別稿でも述べたように、シャーロットはスミス・カレッジを1881年に卒業し、1883年から85年まで同窓会長を務めた（Five College Archives & Manuscript Collection（http://

asteria.fivecolleges.edu/findaids/Smitharchives / manosca337_main.html（2017.9.22 閲覧））所載の資料による）。

(35)「日記」『著作集』第 1 巻 528 頁（原文英語）。

(36) 但しこの時期の日記に記された日にちの記述には、やや不明な個所がある。

(37) のちに日本女子大学校創設の際、大山捨松は発起人の一人に名を連ね、津田梅子は賛助員となった。なお、津田梅子の 2 度目の留学期間（1889.7 ～ 1892.8）は、成瀬の留学期間と重なるが、両者が留学中に交流した記録はない。しかし津田は 1891 年 11 月に、アリス・パーマーが有力会員だった既述の MSUEW に招かれ、「教育と啓蒙―日本女性は現在何を必要としているか」と題する講演を行っている（前掲『アメリカ大学史とジェンダー』88 頁）。両者はアメリカで、意外に近いところにいたのである。

(38)「日記」『著作集』第 1 巻 534-535 頁（原文英語）。

(39) 同上 537 頁。

(40) 同上 534 頁。

(41) ウースター州立大学の H.P.（http://www.worcester.edu/Worcester-State-University-History/#Early_Years（2017.9.16 閲覧））による。

(42)『日本女子大学学園事典―創立 100 年の軌跡―』（日本女子大学、2001 年）165 頁。

(43)「日記」『著作集』第 1 巻 530 頁。

(44) 麻生正蔵「ウイリアム、ゼームス教授に就て」（『家庭週報』第 100 号、1907 年 5 月 25 日）『麻生正蔵著作集』（日本女子大学成瀬記念館、1992 年）39 頁。麻生によればジェイムズの講義を聴き、「寓所」を訪ね、逆にジェイムズは麻生の下宿を 2 度訪ね、著書を贈呈してくれたと言う。帰国後も書簡の往復をしたとのことで、その一つを『家庭週報』に紹介している。これは、麻生の招きで訪日するつもりだったが健康上の理由等で不可能になったと述べたものである。二人の親密な交流の様子が窺える。

(45) ジェイムズのプラグマティズムの成瀬への影響については、影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想―成瀬的プラグマティズムと日本女子大学校のおける教育―』（風間書房、1994 年）が詳しい。

(46) 馬場哲雄「成瀬仁蔵とアメリカ留学中の女子高等教育における体育・スポーツ」（『日本女子大学紀要・人間社会学部』第 15 号、2004 年）95 頁。

(47) なおスミス・カレッジもサーゼント方式を導入したことについては、のちに渡米した麻生正蔵が詳しく述べている（「スミス女子大学校友会　談」（『家庭週報』第 73 号、1906 年 8 月 18 日）前掲『麻生正蔵著作集』27 頁）。

(48) 新潟におけるオラメル・ギューリックについては本井康博『近代新潟におけるプロテスタント』（思文閣出版、2006 年）、同『近代新潟におけるキリスト教教育』（思文閣出版、2007 年）に詳しい。なお、本誌 52 号の拙稿「新潟の成瀬仁蔵―試練のなかの牧師生活―」でも名前を挙げたことがある（そこでは「O.H. ギュリック」）。

(49) シドニー・ギューリックは、「青い目の人形」による日米親善活動でも知られる。これについては増渕宗一「青い眼の人形研究（一）―ギュリック博士と成瀬仁蔵―」（『日本女子大学紀要・文学部』第 35 号、1985 年）などに詳しい。

(50) なお麻生正蔵もニューヨークでギューリックに会っている（「欧米漫遊雑感」（『なでしこ』第 7 巻第 4 号、1907 年 2 月）『麻生正蔵著作集』34 頁）。

(51)「日記」『著作集』第 1 巻 530、529 頁。なお日記では「President」とあるが、スプリング・フィールド・カレッジの H.P.（http://springfield.edu/archives/college-history（2017.9.16 参照））によればリードはこの時期すでに校長を退任していたはずである。しかし初代校長として学校への影響力を保持していたとのことであるので、成瀬は校長と勘違いしたのであろう。

(52)「日記」『著作集』第 1 巻、531 頁（原文英語）。

(53) この時の経験は、成瀬にとって極めて印象深いものであった。成瀬は、1912 年のエリオット来日の際に下記のような礼状を贈った。「（前略・片桐）先生は若し小生を御記憶なき

やも難計候へ共、小生は十数年前貴国滞在中屢々拝芝、現に小生が校長たる日本女子大学資金募集に関し高論を仰ぎたる事有之候。小生は其高論につき深大なる謝意を捧げざるを得ざるの念に堪へ不申候（後略・片桐）」。『家庭週報』第191号1912年6月25日には、礼状の英語原文と上記の日本語訳文が掲載された。

(54)「日本に於けるエリオット博士」（『六合雑誌』379号、1912年8月）。エリオット博士談「女子の高等教育」（『家庭週報』第192号1912年7月12日）。

(55)「欧米旅行報告」（『帰一協会会報』第二1913年7月、『著作集』第3巻（日本女子大学、1981年）642頁）。

(56)「大学教育法改善案（五）」（『家庭週報』第358号1916年3月17日、『著作集』第3巻794頁）。

(57) 前掲『女子教育』7頁（『著作集』第1巻35-36頁）。以下（7：35-36）と表記する。また傍点。は・、ゝは丶、△と●は下線で示す（『著作集』ではすべて丶になっている）。

(58) 成瀬は、当時の用語法に則して、人格（personality）を「為人」、一般教育（general education）を「普通教育」と述べている。「普通教育の目的は為人を養成するにあり」（13：38欄外）というように。

(59) ここに言う「家政学」は、その関連分野として「社会学、倫理学、教育学、審美学、衛生学、看病学、料理学」（22：43）を挙げるものであるが、その意義は、今日の家政学と比較しつつ、改めて検討する必要がある。

(60) 当時の日本の教育界では、もっぱらドイツから輸入されたヘルバルト派の教育学が隆盛で、教育目的を「道徳的品性の陶冶」とし、管理・教授・訓練の三つを教育方法とするものであった。

(61) 家政部から音楽部までの学科目構成は、成瀬校長時代の梅花女学校が1894年7月に実施した校則改正で設置した専門科の内容ときわめて類似している。

(62) 念のためだが『著作集』第1巻に「体育学部」とあるのは誤り。

(63) この意義については「近代日本における個人性（個性）と社会性―日本女子大学校創設者・成瀬仁蔵の所論を手がかりに―」（『愛知教育大学研究報告』第63輯（教育科学）、2014年）で述べたことがある。